

第二言語がその学習者の母語に与える影響 — 翻訳過程に見られた特徴 —

小川都・劉永亮・趙麗雯

要旨

In the research field of second language acquisition, there are many studies on the influence of a learner's native language on the learner's second language acquisition. However, for learners who have a high level of proficiency in a second language, it is possible not only that their mother tongue influences their second language, but also that their second language influences their mother tongue. Therefore, in this study, we investigated whether there is an interaction effect between learners' mother tongue and second language and its characteristics through translation tasks. As a result of analysis from the perspective of contrastive linguistics, we found that not only grammar, but also various aspects such as lexical level, syntactic level, and written expression, have the possibility of native language transfer and retrograde transfer, as well as the possibility of mutual interaction in multiple languages. In other words, there are cross-linguistic influences that occur in all situations.

キーワード

第二言語習得、「交差言語的影響」、言語の逆行転移、対照言語学の観点

I. 研究背景

第二言語習得の研究分野において、学習者の母語がその学習者の第二言語の習得に与える影響に関する研究が多い。奥野(2018)は、母語が学習者の表現能力に与える影響について研究しており、また、劉(2018)は、学習者の母語の発音が日本語の発音に与える影響について研究している。さらに、孟(2020)は、母語の知識が日本語の語彙習得に与える影響について研究している。そのほか、白・向山(2014)のような、母語と第二言語の類型論的關係が第二言語の文処理に与える影響に関する研究もある。以上の研究では、総じて母語から第二言語への言語転移が発生していることを指摘している。しかし、言語転移は必ずしも一方通行ではなく、Sharwood-Smith&Kellerman(1986)は、今学習している言語が母語あるいは既習した言語に影響を与える可能性もあると指摘し、「交差言語的影響」が起こりうると示唆した。

外国語の言語運用能力の獲得は、その母語の言語運用能力によって支えられていると言われるが、日本において、第二言語である日本語の言語環境の下で長年生活している日本語習熟度の高い学習者は、正確な日本語の文法や語彙の習得だけでなく、

日本の社会や文化を背景にした日本人の言語観や言語習慣に従いながら、自分自身の第二言語である日本語の言語運用能力を形成している。そのため、本研究は、第二言語である日本語の使用頻度がその学習者の母語の使用頻度を上回った時に、第二言語である日本語は、学習者の母語に逆行転移の影響を与えるか、また、逆行転移の影響があるとしたら、どのような側面で影響があるか、かつその特徴について検討したい。

II. 先行研究

■ 1. 逆行転移とは

Sharwood-Smith&Kellerman(1986)は、「交差言語的影響」という第二言語習得においては単なる、音声、語彙、文法のレベルにおける母語から第二言語の転移という現象にとどまらず、第二言語が母語に影響を及ぼすこともあり、脳内に共存する言語の作用、つまり複数言語の双方向的な相互作用の可能性を示唆した。

Cook(2003)は、言語転移について第二言語から第一言語への影響を「言語逆行転移」と名付けた。本研究ではCook(2003)での定義に従い、第二言語から第一言語への影響を逆行転移と呼ぶ。

■ 2. 「言語逆行転移」に関する研究

「言語逆行転移」に関する研究は、言語転移の研究ほど数多くない。その中で、文法における逆行転移に関する研究は、李(2007)、金(2009)、山田(2010)、尹(2016)など挙げられる。

李(2007)は、韓国人日本語学習者が日本語を習得していく過程の中で起きる両言語間の影響を検討した。「[してしまう]」、「[していく]」、「[してくる]」といった日韓類似表現について、韓国語母語話者と日本語母語話者のそれぞれ当該表現の使用傾向と比較し、韓国人日本語学習者の使用傾向を分析した。

尹(2016)は、韓国人日本語学習者に対し「～てもらう」の使用に焦点を当て、アンケート調査、事例調査、翻訳文調査、許容度調査、作文調査といった5種類の調査を行った。その結果、第二言語である日本語が母語である韓国語に影響を与えることが検証できた。

金(2009)は、朝鮮語と中国語のバイリンガルである中国の朝鮮族を対象に、助詞を中心とする統語的現象の逆行転移について検討した。その結果、中国の朝鮮族は、第一言語である朝鮮語の使用において、第二言語である中国語の影響を受けていることを明らかにした。

また、澤崎・張(2020)のような、中国語を母語とする初級・上級レベルの日本語学習者を対象に、目的語の省略文からみる母語転移と逆行転移の可能性についての調査もある。

そのほか、言語表現における逆行転移に関する研究は、崔(2013)、山田(2010)、姫(2022)など挙げられる。

崔(2013)は、長年日本語を習得した韓国人学習者の韓国語の自然談話を分析し、日本語が韓国語の使用にどのような影響を与えるかについて調査を行った。

山田(2010)は、英語に接する頻度の異なる日本人大学生を対象に、母語である日本語での断りの発話行為に英語の影響が見られるかを検討した。

姫(2022)は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、依頼表現における日本語の影響について調査を行った。

これら多くの先行研究は、両言語または両国の文化による差異に焦点を当てた研究、また、ある一つの文法に焦点を当てた研究である。しかし、母語と第二言語の両言語において、あらゆる側面で起きる「交差言語的影響」の可能性について言及していない。

Ⅲ.研究の目的と研究方法

■1.本研究の目的

本研究では、先行研究を踏まえて「交差言語的影響」は、母語と第二言語の両言語において、文法のみならず、語彙や表現、また、文化差異などにも表れるかを検討したい。

そのため、日本語習熟度の高い学習者の翻訳課題にみられた問題を、対照言語学の観点から、語彙レベル、文法レベル、構文レベル、および文章表現の側面に分けて、「交差言語的影響」の可能性を検討したい。

■2.研究方法

第二言語である日本語の言語環境の下で長年生活している日本語の習熟度が高い学習者の中には、母語、教育レベル、生活環境、日本語の使用頻度などの違いから、さまざまなタイプが存在する。そのため、本研究は「第二言語である日本語の使用頻度がその学習者の母語の使用頻度を上回った時に、第二言語である日本語は、その人の母語に逆行転移の影響を与えるか、また、逆行転移の影響があるとしたら、どのような側面で影響があるか、かつどのような特徴があるか」を検討するため、今回は、以下の条件に絞って検証した。

■2-1.検証対象と内容

- 1) 長期間日本で生活している者。
- 2) 日本語の使用頻度が母語より高い者。
- 3) 教育レベルが大学院(修士)修了以上の者。
- 4) 日本語レベルが日本語能力試験(JLPT) N1以上の者。
- 5) 母語が中国語である者。(紙幅の問題で母語は他言語である検証は別稿に譲る)
- 6) 検証する内容は、第二言語である日本語の文を母語である中国語に翻訳した内容。(口頭表現や聴解理解に関する検証は別稿に譲る)

■2-2.検証方法

本研究は以下の方法で検証した。

まず、検証対象に第二言語である日本語の文を母語である中国語に翻訳させた。次に、中国国内にいる日本語学習経験のない中国語母語話者によって、翻訳された中

国語の文の文法、語彙の正確性や表現の自然さなどを評価してもらい、不自然だと考えられた箇所の校正を依頼した。

最後に、日本にいる中国語を母語とする日本語学、また、日本語教育学の専門家によって、その翻訳する過程でみられた不自然な箇所の問題点を整理し、その特徴を纏めた。

■2-3.検証基準

文の自然さの判断について、最近の研究では、Masked Language Model(MLM) 事前トレーニングされたマスク言語モデル(単語を予測する条件付き確率を計算する方法)によって文の自然さを計算する方法がある。しかし、統計的な方法は、文自体の文法や語彙、構文の正しさや自然さを評価する上では良い指標になると考えられるが、文脈における表現の適切さなどについてまでは評価の対象に入れるのは難しい。林部・雨宮(1991)では、「文の“自然さ”の判断とは、ある言語を母国語とする話者が、特定の文がその言語で使用可能かどうかについて行い判断のことである」と定義している。そのため、本研究では、文の自然さのみならず、文脈における適切さも含めた評価を検証基準とする。また、文の自然さを判断する者に関しては、方言による差が結果に与える影響を最小限に抑えるために、調査対象者全員中国語の標準語(普通話)を使用する北京を中心とする中国の北地方出身の者に限った。さらに、評価のレベルを統一するために、評価者は日本語学習歴のない中国語学の専門家に依頼した。

IV.研究概要

■1.調査対象

本研究では、検証対象と検証内容の基準に従い、次の条件に合致する調査対象者3名を選出した。以下、調査対象者と呼ぶ。

- 1) 日本滞在歴: 来日年数が10年以上である。
- 2) 日本語利用頻度: 日本で就職や進学し、日常的に日本語を使用している。
- 3) 教育レベル: 大学院修士課程修了は1名、博士後期課程修了は2名である。
- 4) 日本語レベル: 日本語能力試験(JLPT) N1を取得している。
- 5) 母語: 母語が中国語である。

■2.翻訳内容の選定

本研究では、選出した調査対象者の仕事内容や翻訳の経験の有無、翻訳作業の負担、また、翻訳内容が日本語学習経験のない評価者の背景知識の範囲を超えないよう考慮し、使用する日本語の文の難易度を下げ、日本の小学3年生向けの課外の読み物を選出した。大山光晴(2019年)『なぜ?どうして?科学のお話3年生』の一部分の内容を使用した。

■3.翻訳内容に対する評価

中国語の標準語(普通話)を使用する中国の北地方出身で、かつ、日本語学習経験のない中国語学の専門家5名に次の評価作業を依頼した。以下、評価者と呼ぶ。

- 1) 評価者は、調査対象者が日本語から中国語に翻訳した文を読む。
- 2) その文の自然さについて判断し、不自然だと感じる箇所印をつける。
- 3) さらに不自然だと思われる文の箇所を校正する。

■4.分析方法

調査対象者が翻訳した文に対して、評価者の校正過程で見つかった不自然な箇所について、対照言語学の観点から、中国語を母語とする日本語学、または、日本語教育学の専門家によって、語彙レベル、文法レベル、構文レベル、および文章表現の側面から分析した。

V.結果と考察

■1.語彙レベルの問題

調査対象者が翻訳した文の中で、評価者によって抽出された不自然だと思われる箇所において、類義語の不適切な使用が見受けられた。以下はその例文である〔原文や翻訳文に下線が引かれている部分は不自然だと思われる部分である。語彙の説明に関しては、日本語の訳文の意味は、松村明編『大辞林第三版』（2006年10月27日発行）、中国語の訳文の意味は、中国社会科学院语言研究所词典编辑室（编者）（著）『现代汉语词典（第7版）』（2016年9月出版商務印書館発行）を参照した。また、以下の例文の説明において、「」の中には、中国語の辞書に書かれている訳文で、（ ）の中には、日本語の辞書に書かれている訳文である〕。

①原文：夜の暗い道で、猫の目がキラッと光るのを見ると、びっくりしますよね。

翻訳文：当看到猫的眼睛在黑暗中闪烁时会很惊讶吧。

校正された文：当看到猫的眼睛在黑暗中发光时会很惊讶吧。

この例文の不自然な箇所は、闪烁と发光の2つの語彙の使用である。闪烁とは、「光晃動不定貌（光が瞬く、ちらちらと光る様子）である。发光とは、「物体发射可见光的现象（光を出す輝く様子）である。日本語の訳に従うならば、闪烁を使っても問題ないように思われるが、実際の中国語の解釈は、光が揺れて不安定な様子だと解釈している。それに対し、发光は、光を出す様子だと解釈し、日本語の訳と同じである。原文は、文脈から言えば、猫の目を見たときに目から光を出して輝く様子にびっくりする意味である。そのため、闪烁より发光の方が中国語の訳文に合っている。

②原文：硬いものが当たった時のショックを和らげるなど、……

翻訳文：头部碰撞到坚硬物体时也有缓和的作用。

校正された文：头部碰撞到坚硬物体时也有缓冲的作用。

この例文の不自然な箇所は、缓和と缓冲の2つの語彙の使用である。缓和とは、「①缓和犹和缓。与“紧张”相对②指国际关系的和缓状态」（和らぐ、緩和させる）である。「缓冲」とは、「使冲突缓和」（衝突を和らげる）である。日本語の訳に従うならば、缓和を使っても

問題ないように思われるが、実際の中国語の解釈は、緊張状態を和らぐことと解釈している。それに対し、缓冲は、衝突に対して和らぐことと解釈し、日本語の訳と同じである。原文は、文脈から言えば、頭部が固い物体にぶつかった時にその衝撃を和らぐ意味である。そのため、缓和より缓冲の方が中国語の訳文に合っている。

③原文:普段横になって寝ている毛がまっすぐに立ち、……

翻訳文:平常横向躺倒的毛发会直立起来, ……

校正された文:平时横向躺倒的毛发会直立起来, ……

この例文の不自然な箇所は、平常と平时の2つの語彙の使用である。平常とは、「①普通、不特別。②往常」(普通、普段)である。平时とは、「①一般的、通常的時。②平常时期。」(いつも普段、平静な時期)である。日本語の訳に従うならば、平常を使っても問題ないように思われるが、実際の中国語の解釈は、非常ではない時に横になって寝ている毛がまっすぐに立ちあがったと解釈している。それに対し、平时は、普段横になって寝ている毛がまっすぐに立ちあがったと解釈し、日本語の訳と同じである。そのため、平常より平时の方が中国語の訳文に合っている。

④原文:では、髪の毛は、どうやって伸びるのでしょうか。

翻訳文:那么, 头发是怎么长长的呢?

校正された文:那么, 头发是怎么生长的呢?

この例文の不自然な箇所は、长长と生长の2つの語彙の使用である。长长とは、「生长的口语表现」(伸びる)である。生长とは、「通常伴随着发育过程的细胞分化和形态建成。」(〈植物〉生長する、〈植物や動物、人〉成長する)である。长长と生长の中国の意味としては同じであるが、書き言葉としてやはり生长が適切である。

■2.文法レベルの問題

調査対象者が翻訳した文の中で、評価者によって抽出された不自然な箇所において、連語関係(コロケーション)の不適切な使用が見受けられた。以下はその例文である。

⑤原文:そのため皮膚が伸びるのです。

翻訳文:为此也就导致了皮肤变皱。

校正された文:也就导致了皮肤变皱。

そのためは、因果関係の結果を表す接続詞である。中国語の为此も接続詞で結果を導く。また、中国語の导致も、引き起こす、招くという意味で、因果関係を表す。この翻訳文は、1文の中において、接続詞が過剰に使用されている。

⑥原文:鳥の皮のような肌になるので、「鳥肌が立つ」と言われています。

翻訳文:之所以被称为“鸡皮疙瘩”，因为皮肤看起来像鸟的皮肤。

校正された文:之所以被称为“鸡皮疙瘩”，是因为皮肤(改成这个时候的皮肤)看起来像

鶏の皮膚。

文脈からみると、原文の前半は原因であって、後半は結果となっている。それに対し、翻訳文の前半は結果となり、後半はその結果につながる原因を強調する形となっている。このような翻訳は中国語の言語習慣にしがっているだけで、意味は変わっていない。中国語の「之所以…是因为…」は(…なのは…だからだ)という意味で、決まった形で用いられる連語関係(コミュニケーション)である。しかし、翻訳文の中では、是という判断動詞が抜け落ちていた。

調査対象者が翻訳した文の中で、評価者によって抽出された不自然な箇所日本語の助詞に対応関係のある「介詞」や「结构助詞」の不適切な使用が見受けられた。以下はその例である。

⑦原文:植物に例えると、根に当たる部分です。

翻訳文:拿在植物来说的话就相当于根。

校正された文:拿植物来说的话就相当于根。

翻訳文にある在は、日本語の助詞にあたる中国語の「介詞」で、その意味は、(…にとってみれば、…)である。一見原文の意味に合っているが、翻訳文の在の前にさらに「拿…来说的话」(…についていうと、)という連語関係(コミュニケーション)も使用していた。この翻訳文が不自然な文になっている原因は、介詞を過剰に使用している。

⑧原文:下の層ほど新しく、上に行くほど古くなります。

翻訳文:并且越是深层越是由新细胞构成，越是接近表层就越是旧细胞。

校正された文:并且越是深层越是由新的细胞构成，越是接近表层就越是旧的细胞。

原文の中の新しくや古くというのは、「文語」シク活用の形容詞(新しい)や(古い)の連用形であり、新しくや古く形成された細胞という意味である。一見、翻訳文にある新细胞や旧细胞と校正された文の新的细胞や旧的细胞は同じく日本語(新しい細胞や古い細胞)に訳されるが、中国語の文脈から(新しく、または古くなる)という意味を考えると、中国語の「结构助詞」的は形容詞の後ろにつけることが必要だと考えられる。この翻訳文が不自然な文になっている原因は、「结构助詞」的の脱落である。

⑨原文:では、血は、体の中にどのくらいあると思いますか。答えは、大人で約4～5リットルです。

翻訳文:那么，你认为身体里有多少血液呢？答案是一个成年人大约有4-5升。

校正された文:那么，你认为身体里有多少血液呢？答案是一个成年人大约有4-5升血液。

原文の中の答えの部分において、目的語の血液が省略されていた。中国語の会話の中では、

話し手と聞き手の間に共通認識があれば目的語が省略できるが、文の中では、省略できない。

この翻訳文が不自然な文になっている原因は、目的語の省略である。

⑩原文:髪の毛の本数は、人によって違いますが、およそ十万本ぐらいと言われています。

1日に約0.3ミリメートルずつ、1ヶ月では、約1センチメートルくらい伸びます。

翻訳文:头发的数量因人而异、大概有10万根左右。一天能长出0.3毫米左右。

校正された文:头发的数量因人而异、(一般一个人)大概有10万根左右。(头发)一天能长出0.3毫米左右。

原文を省略せずに書けば、(髪の毛の本数は、人によって違いますが、一人に付きおよそ十万本ぐらいと言われています。髪の毛は、1日に約0.3ミリメートルずつ、1ヶ月では、約1センチメートルくらい伸びます。)のようになる。しかし、(一人に付き)や(髪の毛は、)の部分が省略されていた。また、翻訳文はそのまま省略した形で訳されていた。この翻訳文が不自然になっている原因は、連用修飾語と主語の省略である。

■3.構文レベルの問題

調査対象者が翻訳した文の中で、評価者によって抽出された不自然な箇所は語順の逆転現象が見受けられた。以下はその例である。

⑪原文:血液を体中に送り出す、ポンプのような働きをしているのは心臓です。

翻訳文:把血液输送到身体中,发挥着像泵一样作用的是心脏。

校正された文:发挥着像泵一样的作用,把血液输送到身体中的是心脏。

原文は、心臓の機能について説明している。翻訳文は、原文の日本語の語順通りに訳しており、中国語の動作の順序を無視したため、中国語訳は不自然な文になっている。

⑫原文:人間の体は体温が上がりすぎるとうまく働かなくなり、熱中症などの病気になってしまいます。

翻訳文:人类的身体如果体温过高的话就会变得不能运作,产生中暑等疾病症状。

校正された文:如果体温过高的话人类的身体就会停止活动,产生中暑等疾病症状。

原文の文脈から、最初の部分は因果関係の…すぎるという条件文で、後ろの部分は結果となる。翻訳文は、原文の日本語の語順通りに訳しており、中国語の因果関係の条件文の順序を無視したため、中国語訳は不自然な文になっている。

■4.文章表現の問題

調査対象者が翻訳した文の中で、評価者によって抽出された不自然な箇所に不適切な表現の使用が見受けられた。以下はその例である。

⑬原文:だから尻尾が短い猫は、長い猫に比べると高いところが苦手なようです。

翻訳文: 所以尾巴短的猫跟尾巴长的猫相比不擅长高处。

校正された文: 所以尾巴短的猫跟尾巴长的猫相比不擅长在高处保持平衡。

原文の文脈から、高いところが苦手というのは、猫の尻尾が短いと高いところに登った時にバランスをとることが難しいという意味である。中国語の擅长は(得意とする、長じる)という意味で、その後ろに得意とする内容の名詞が対応すべきである。しかし、高处の意味は、(高いところ)という場所を指す名詞ではあるが、得意とする内容ではない。そのため、翻訳文の不擅长高处という表現は、日本語の高いところが苦手という言葉の直訳で、中国語として適切な表現ではない。それよりも、校正された文の不擅长在高处保持平衡(高いところでバランスを保つのが得意ではない)の方がより原文の意味に合っているとと思われる。

⑭⑫番の例文を再掲する。

⑫原文: 人間の体は体温が上がりすぎるとまぐ働かなくなり、熱中症などの病気になってしまいます。

翻訳文: 人类的身体如果体温过高的话就会变得不能运作，产生中暑等疾病症状。

校正された文: 如果体温过高的话人类的身体就会停止活动，产生中暑等疾病症状。

原文の働かなくなりという言葉は、翻訳文では不能运作と訳しているが、中国語では(作動する)という意味で、主にコンピュータ関係に用いられるため、校正された文のように停止活动と訳されたほうが自然だと思われる。

⑮⑥番の例文を再掲する。

⑥原文: 鳥の皮のような肌になるので、「鳥肌が立つ」とされています。

翻訳文: 之所以被称为“鸡皮疙瘩”，因为皮肤看起来像鸟的皮肤。

校正された文: 之所以被称为“鸡皮疙瘩”，是因为皮肤(改成这个时候的皮肤)看起来像鸡的皮肤。

原文の鳥の皮のような肌を本来は像鸡的皮肤と訳すべきところを像鸟的皮肤のように直訳していた。

VI. まどめ

本研究は、調査対象者が翻訳した文に対して、評価者の校正過程で見つかった不自然な箇所を整理し、対照言語学の観点から、語彙レベル、文法レベル、構文レベル、および文章表現の側面から分析した。その結果、以下のことが分かった。

■ 1) 語彙レベルの問題について

例文①②③のように、翻訳文の問題だと思われた箇所について、校正される前と校正された後の語彙は、中国語の類義語にあたるが、日本語の文脈から考えるとやはり使い分ける必要があった。特に、漢字語として日本語の中でも使用される語彙であれば、

翻訳する際に安易に想起されるため、利用頻度が高くなる。しかし、翻訳された中国語の文脈から考えると、それは、最適な語彙の選択肢ではない可能性がある。

また、例文の④のように、翻訳文の問題だと思われた箇所について、校正される前と校正された後の語彙は、意味が非常に近いものであったが、中国語の書き言葉と話し言葉を使い分ける必要があった。

■2)文法レベルの問題について

例文⑤⑥では、翻訳文の問題だと思われた箇所について、校正される前と校正された後の連語関係(コロケーション)に一部脱落が生じていた。

また、例文⑦⑧では、日本語の助詞に対応関係のある「结构助词」や「介词」の脱落および過剰使用の問題が生じていた。

さらに、例文⑨⑩では、主語また目的語、修飾語が省略されてしまう問題が生じていた。

日本語の文を中国語に翻訳する際に、日本語では省略可能な主語や目的語、連用修飾語を省略せずに、日本語の文に付け足して中国語に訳す必要がある。

■3)構文レベルの問題について

例文⑪⑫では、中国語の動作の順序、文の因果関係を表すために重要な語順を無視し、日本語の文の語順のままに直訳したため、中国語の語順の逆転現象が生じていた。そのため、翻訳文は不自然な文となっていた。

■4)文章表現の問題について

例文⑬⑭⑮では、日本語の表現に影響され、日本語の形や表現のままにして翻訳してしまった中国語の文は、不自然な文となっていた。

本研究を通して、まず、第二言語の使用頻度が学習者の母語の使用頻度を上回った時に、その人の母語に第二言語による影響があったことが検証された。また、対照言語学の観点から分析した結果、第二言語の文を母語に翻訳する際に、語彙レベル、文法レベル、構文レベル、および、文章表現といった各側面においても、不自然な文が産出されており、その原因は、**文法のみならず各側面における母語転移と逆行転移の可能性、また、複数言語における双方作用の可能性**がある。つまり、あらゆる場面で起きる**交差言語的影響**があると考えられる。

Ⅶ.今後の課題

本研究では、母語が中国語で、第二言語である日本語の習熟度が高い学習者に限定したため、調査対象者の人数が少ない。また、検証内容を第二言語である日本語の文から母語である中国語への翻訳に限定したため、口頭表現や聴解理解の面においては、交差言語的影響が存在するかは検証できていない。そのため、今後の課題としたい。

本研究は、2023年8月に中国の青島で行われた「漢日対比言語学研究会・第十四届漢日対比言語学研讨会」において口頭発表した内容を修正、加筆したものである。また、本稿を完成させるため、翻訳作業にご協力頂いた皆様、また、翻訳文の評価作業にご協力頂いた先生方に感謝を申し上げます。

参考文献

- 尹テレサ (2016) 第二言語から第一言語への言語転移現象に関する実証的研究: 韓国人日本語学習者の「てもらう」表現に注目して、東京学芸大学大学院教育学研究科博士論文 (未刊行)
- 奥野由紀子 (2018) 「日本語学習者に共通して見られる現象と母語による違い—I-JAS のストーリー描写課題の分析より—」『日本語教育連絡会議論文集』30号、日本語教育連絡会議 pp.67-75
- 金春香 (2009) 「第二言語習得による第一言語への統語的影響—中国朝鮮族をモデルに—」『言語科学論集』13 pp.1-13
- 澤崎宏一・張昀 (2020) 「目的語省略文にみる中国人日本語学習者のL1転移と逆行転移—省略の有無と有生性が転移にどのように影響するのか—」『第二言語習得研究の波及効果—コアグラマーから発話まで—』
- 鈴木恵理子 (2013) 「中国人日本語学習者の逆行転移: 日本滞在期間に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』23-18
- 林部英雄・雨宮朋子 (1991) 「言語機能が文の“自然さ”の判断に与える影響—発達の観点からの実験的検討—」『横浜国立大学教育紀要』31号105-115
- 白春花・向山陽子 (2014) 「モノリンガル及びバイリンガル日本語学習者の文処理—競合モデルに基づく類型論的観点からの分析—」『第二言語としての日本語習得研究』pp.23-40
- 孟盈 (2020) 「単漢字和語動詞と中国語同形漢字における漢字類型性の認識—中国語を母語とする日本語学習者を対象に—」『日本語研究』40号pp.85-96
- (2021) 「中国語を母語とする日本語学習者における単漢字和語動詞の習得研究—インドネシア語を母語とする日本語学習者との比較を通して—」『日本語教育』pp. 185-199
- 姫宇禾 (2022) 「依頼場面における中国語を母語とする日本語L2使用者の言語逆行転移」『日本語研究』42号pp.47-58
- (2022) 「中国語を母語とする日本語L2使用者の逆行転移—依頼表現に注目して」(東京都立大学修士論文 未公開)
- 劉永亮 (2018) 「日本語学習者の理解程度に現れる母語の影響—バイリンガルとモノリンガルの比較を通して—」『日本語研究』38号pp.45-58
- 山田恵美子 (2010) 「第二言語が母語に与える影響-断り発話の分析から—」『N EAR confer ence proceedings working papers NEAR-2010-11』pp.1-15
- Sharwood Smith, M., & Kellerman, E. (1986). *Crosslinguistic Influence in Second Language Acquisition*. New York:pergamon press
- Cook, Vivian (2003) *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon.UK:Multilingual Metters